



Title	「箆形土器」の検討
Author(s)	金澤, 舞
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 295-308
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105048
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「筴形土器」の検討

金 澤 舞

はじめに

いわゆる「筴形土器」は、前期後葉から中期後葉にかけて、特に大王墓や地域を代表する古墳から出土する内外面に編組品の圧痕をもつ土製品で、食物形土製品や小型土師器とともに、古墳における飲食物供献儀礼を表す器物と考えられている。本稿は、この「筴形土器」について、実見を通して得た知見をもとに若干の検討を試みたものである。

1. 研究史と課題

(1) 研究史

内外面に編組品の圧痕をもつ「筴形土器」が初めて報告されたのは、佐藤美津男による（佐藤 1937 : pp. 15-17）。佐藤は岡山県金蔵山古墳出土資料を紹介するなかで、その製作技法について、2枚の「筴」^①を使用し内外面から押圧することで製作されたとみた。その後、同古墳での発掘調査（西谷・鎌木 1959）や岡山県陣馬山古墳（木村・土井 1957）、同県月の輪古墳（近藤編 1960）で立て続けに出土が確認された。その製作技法については、鎌木義昌も金蔵山古墳の報告書の中で佐藤と同様の製作技法を示し、加えて口縁部については「削って整形したもの、ほとんど手を加えていないものがある」とその特徴を示した（西谷・鎌木 1959 : p. 73）。ただし、この段階ではこうした内外面に編組品の圧痕がつく資料の類例はいまだ少なく、外面にのみ筴の圧痕がつく「籠型土器」とひとくくりに取り扱われた。こうした中でも当該資料に係る重要な指摘がいくつかなされている。小林行雄は、遺跡出土の編物を検討する中で「籠型土器」についても触れており、原体となる「籠」の編み方が共通することを指摘している（小林 1964 : pp. 152-153）。また、植松なおみは「カゴ類」を検討する中で、「カゴ型土器」は「カゴ」を土器製作のための型として使用したものではなく、何らかの意味をもって意識的に付したものである可能性を指摘した（植松 1980 : p. 26）。

内外面に編組品の圧痕がつくものと外面にのみ圧痕がつくものを明確に分類したのは、平子弘である。平子は三重県天道遺跡出土の「籠目土器」を検討するなかで、土器の形態と「籠目痕」の付き方から分類を行った。また、古墳以外の遺跡から出土する例は古墳時代前期に、古

墳出土例は古墳時代中期に多いとし、植松同様、圧痕は製作技法によるものではなく、意図的な「籠目を器面に付けること自体を目的とする加飾技法ないしは施文技法の一種」として捉えた（平子 1989 : pp. 24-25）。

東方仁史は兵庫県行者塚古墳出土資料を検討するなかで、「笊形土器」は法量や器形、圧痕される「笊」の編み方の共通性が高く、また、出土場所は基本的に古墳で、分布は畿内から西、とくに畿内と岡山県に多くみられることを指摘した。東方は、「笊形土器」が内外面に「笊」の圧痕をつけることや一般集落等では出土しないこと、赤色顔料が塗布されるものがあることから、「有機物である笊を恒久的な土製品に置き換えたもの」で、祭祀専用の特別な器であるとした（東方 1997 : pp. 80-90）。また、堀大輔は同じく行者塚古墳出土の土製品を検討するなかで、「笊形土器」は土師器高杯や壺、食物形土製品とともに、古墳での供献儀礼のセットを構成するものである可能性を指摘した（堀 1997 : p. 91）

内外面に編組品の圧痕がつくものと外面にのみ圧痕がつく 2 者について、系統が異なるものであることを明瞭に示したのは鐘方正樹・角南聡一郎である。鐘方・角南は、全国的に詳細な集成を行い、外面にのみ圧痕がつく「籠目土器」は 3 世紀後半～4 世紀前半に近畿地方を中心として分布し、5 世紀後半～6 世紀中頃にかけて東海地方の特に三河、遠江地方を中心としてごく一般的にみられ、おそらく弥生時代後期にあらわれてくる分割成形技法の技術的系譜を引いて出現した一手法と推定した。一方、内外面に圧痕をもつ「笊形土製品」は、法量が概ね口径 8.5～15.5cm、器高 2.5～5.0cm の範囲にまとまること、また「籠目土器」よりも相対的に小型の「籠」が用いられる傾向があることを指摘したほか、奈良県ウワナベ古墳出土資料については、「成形方法は、接合痕がまったく認められないことから、すべての個体が粘土板によるもの」とみた。加えて、その出現時期は定形化された形象埴輪や滑石製模造品とともに「古墳時代前期から中期への移行期」で、須恵器にとって代われその終焉を迎えると考えた。また、「笊形土製品」の出土位置を検討した鐘方は、後円部から前方部をみて古墳の主軸右側で検出されることが多いことから、中国の儀礼方式の影響を受けている可能性を指摘した（鐘方・角南 1998 : pp. 1-15）。

一方、篠原浩恵はこれまでの検討視点とは異なり、製作する原体である「笊」から「笊形土製品」の検討を行った。篠原は、「笊形土製品」の原体である「笊」は、底部及び体部下部は 2 本超え、2 本潜り、1 本送りの網代編み、体部上部は 1 本超え、1 本潜り、1 本送りの笊編みで構成された共通性の高いものであることを示した。さらに、「笊」の形態をそのまま写し取った「笊形土製品」は「祭具（神饌具）」であると結論付けている（篠原 2003 : pp. 15-34）。

同年、これまで共通性が強調されてきた「笊形土器」について、東方は岐阜県昼飯大塚古墳出土資料では編組品の圧痕並びに器形から 3 つに細分できる可能性を示した^②。東方はその背景として、製作者が異なるもしくは製作技法が不定でいくつかの製作技法が存在した可能性を

想定している（東方 2003 : p. 272）。東方はさらに 2010 年に、「笊形土器」について、新たに出土した資料を加え、近畿地方（特に奈良県）を分布の中心として、墳形や墳丘規模から大王墓クラスの巨大前方後円墳や地域を代表する大型古墳の墳頂や造出しで出土することを指摘し、共伴事例の多い食物形土製品とともに、「笊形土器」は大和北部勢力が器材形埴輪とともに食物を「笊」に入れた供献儀礼の象徴として創出した可能性が高いと考えた。また、中期中葉以降、「笊型土器」がみられなくなることについては、共伴する食物形土製品もともに確認されなくなることから、鐘方・角南が指摘するように単に一器種が置き換わったと考えるより、儀礼に使用される道具が総体として置き換わったと考える方が適切であろうとの考えを示した（東方 2010 : pp. 41-51）。近年では、「笊形土器」や食物形土製品、小型土器がセットをなす古墳上の飲食物共献儀礼について、文献史料との対比から、笹生衛や穂積裕昌により後に成立する大嘗祭における御饌供進の淵源との評価もなされている（笹生 2020 : pp. 87-120、穂積 2022 : pp. 137-146）。

（2）課題

以上みてきたように、「笊形土器」は主に前期後葉から中期中葉までみられ、概ね法量や形態に大きな差異がなく、圧痕から原体となる「笊」の編み方にも共通性があること、また 2 枚の「笊」で内外から粘土板を挟み込んで製作されること、出土場所は基本的に古墳の墳頂もしくは造出しに限定され、食物形土製品や小型土師器とともに飲食物供献儀礼に関わる古墳での儀礼専用の器物であることについては、共通認識となっているといえる。また、研究としてはその儀礼の創出や衰退、文献史料からその意義についても検討が進んでいる段階にある。しかし、そもそも「笊形土器」を実見して検討した研究が少なく、「笊形土器」自体の分析が十分とはいえず、各属性の差異が何を示すものか不明確な状態にある。そのため、本稿ではまず基礎的な「笊型土器」における各属性が示す事象について検討を試みたい。

2. 用語の整理と時期区分

（1）用語の整理

分析に入る前に、先に本稿で使用する用語について定義しておきたい。「笊型土器」の名称は、東方が昼飯大塚古墳の報告書で「笊を模造した土製品であるとともに、食物を入れる器としての役割も強くもっているため、「笊形土器」という名称を使用する」（東方 2003 : p. 268）と述べて以降、近年では「笊形土器」の名称がよく使用されているように見受けられる（豊川市教育委員会 2015 ほか）。しかし、研究史を紐解いていくと、研究者によって「笊形土製品」「籠目土器」「籠型土器」等の呼称があり、いまだ一定とはいえない。そもそも「笊」は、民俗学

辞典⁽³⁾によると、竹・枝木・蔓・藁・草を材料にして編んだ容器の総称である「籠の一つに箆と呼ばれるものがある」とあり（林 2006 : p. 122）、竹細工を研究する民俗学者の工藤員功も、「箆」は目のつんだ編み方で籠の一種であるとする（工藤 1982 : p. 34）ことから、民俗学では「箆」は「籠」の中の小分類といえる。また、民俗学辞典には併せてその特徴として、「箆」は「米揚箆・味噌漉箆などのように目の詰んだ細かな編み物の、おもに水切りに使われるものが多い。」とあり、日本民具辞典にも同様の記載が存在することから（朝岡ほか編 1997 : p. 235）、「箆」の主な用途は水切りと認識されていることがわかる。翻って「箆形土器」の用途について比較的残存状況が良好な行者塚古墳で確認すると、小型土師器とともに食物形土製品をのせて墳丘上に置かれたものと推測されるのみで、容器としての用途以外、その目的は明確ではない。そのため、用語としては「箆」をも含むより包括的な「籠」の用語の方が適切ではないかと考える。

また、「土器」と「土製品」⁽⁴⁾については、東方が「食物を入れる器」としての機能を重視し「土器」と呼ぶ一方、鐘方・角南は「箆」を土で模造したものであることを重視し「土製品」と呼ぶ（鐘方・角南 1997 : p. 2）。両者は、重要視する観点が異なることによる呼称の違いであるため、いずれが適切か判断するものではない。しかし、「籠」を用いた場合、すでに「籠形土器」という用語が存在することから（角南 1999 : p. 28）、それと区別する意味では「土製品」が適切と考えられる。したがって、本稿では内外面に編組品の圧痕をもつものを「籠形土製品」、その原体を「籠」と呼称し、論を進めることにしたい。

（2）時期区分

近年、大賀克彦らにより古墳の時期区分についてより細分された編年案（大賀 2002）が提示されていることは承知しているが、今回取り扱う古墳の中にはこうした細分に耐えうる資料が十分に確認されていないものが存在すること、また本稿においてそこまでの細かな古墳の編年を要しないことから、本稿では「前方後円墳集成編年」（広瀬 1992、以下「集成編年」という。）に基づいて古墳の時期を区分する。なお、集成編年 3 期を前期後葉、4 期を前期末中期初頭、5 期を中期前葉、6 期を中期中葉、7 期を中期後葉とする。

3. 籠形土製品の分析

籠形土製品は現在、前期後葉から中期後葉までに属する 30 遺跡から出土が確認されている（表 1）。当該資料はすでに研究史で述べたとおり、粘土を内外から原体である籠を押圧して製作されたものであるため、その形態や法量についてはおおそ原体となった籠の形態・法量を反映している。まずは、原体の籠と深い関係性がある属性を検討するが、形態はいずれも大き

表 1 籠形土製品出土遺跡一覧

番号	古墳名	所在地	墳形 ※1	集成 編年	個体 数	法量(cm)※2 口径・器高	外面口縁 部圧痕※3	圧痕後 調整※4	粘土 接合	備考	文献
1	境野1号墳	京都府 大山崎町	方円 57.5	3期	1				○	破片2点同一個体と推定	1
2	五色塚古墳	兵庫県 神戸市	方円 194	3期	1	12.8 2.9				形態・内面底部四隅圧痕、綾編み圧痕で判断	2
3	古市方形墳	奈良県 奈良市	方 27	4期	1+	10 不明					3・4
4	巢山古墳	奈良県 広陵町	方円 204	4期	2	10.2・2.9/ 12.2・3.6	折	口；ケズリ	○		5
5	ナガレ山古墳	奈良県 河合町	方円 105	4期	1+						6
6	鞍岡山3号墳	京都府相楽 郡精華町	円 40	4期	2+	不明・1.1+			○		7
7	宝塚1号墳	三重県 松阪市	方円 111	4期	1	11.5 3.5	巻		○		8
8	高塚山古墳	三重県 桑名市	方円 56	4期	7+		巻	口；ナデ			9
9	昼飯大塚古墳	岐阜県 大垣市	方円 150	4期	10+	9.8～10.7・ 3.1～4.2					10
10	坊の塚古墳	岐阜県 各務原市	方円 120	4期	1+	13.2 2.2	巻・折		○		11
11	内挾1号墳	岡山県 井原市	円 40	4期	1						12
12	金蔵山古墳	岡山県 岡山市	方円 165	4期	7	15・3.5 16.6・3.6		口；ナデ	○	3個は口径15cm、高さ3.5cmで同形・同規模	13・14
15	陣馬山古墳	岡山県 岡山市	方円 14	4～5 期？	3	15～15.8 3.5	巻	口；ヘラナデ		埴輪棺透孔閉塞に2次使用	15
13	五社神古墳	奈良県 奈良市	方円 275	4～5期	1+	12 3.6+	巻				16
14	三笠山古墳	岡山県 総社市	方円 75	4～5期	1+						17
16	百舌鳥大塚山古墳	大阪府 堺市	方円 160	5期	1+	10.6 2.3+			○		18
17	コナベ古墳	奈良県 奈良市	方円 208.5	5期	1	2.8					19
18	乙女山古墳	奈良県 河合町	方円 130	5期	1	10.0 3.0					20
27	郡山新木山古墳	奈良県 大和郡山市	方円 120	5期	1	12.3 3.0					21
19	行者塚古墳	兵庫県 加古川市	方円 100	5期	15	11.7～13.6 2.0～4.3	巻・折				22
20	クワンス塚古墳	兵庫県 加西市	造出付 円 45	5期	10+	10.9～11.4 2.7～3.9		体～口： ナデ			23
21	久津川車塚古墳	京都府 城陽市	方円 180	5期	3	2.6+・3.5			○か		24
22	月の輪古墳	岡山県 美咲町	造出付 円 60	5期	1	16.2 4.2					25
23	北山1号墳	鳥取県 湯梨浜町	方円 110	5期	3	12.5 3.8		体；ナデ	○か		26
24	渋野丸山古墳	徳島県 徳島市	方円 106	5期	3+	11.9～12.9 3.0～3.6	巻？				27
25	百舌鳥御廟山古墳	大阪府 堺市	方円 203	6期	1+	3+	折？			破片2点同一個体と推定	28
26	ウワナベ古墳	奈良県 奈良市	方円 256	6期	3+	10.8～12.5 2.9～3.4	折	口；ケズリ			29
28	梶塚古墳	京都府 城陽市	方 50	6期	3+	10.9 2.9	巻	口；ナデ 体部；ナデ/ ユビオサエ			30
29	船山第1号墳	愛知県 豊川市	方円 95	7期	2+	13.2 3.0		体・口；ナデ			31
30	菅田白鳥遺跡	大阪府 堺市	—	7期 (下限)	3	10.2・2.6 /10.8・2.9	巻				32

※1 墳形は、前方後円墳は方円、円墳は円、方墳は方と表記する。 ※2 法量のうち、数字+は完全に残存していないもので、数字は残存値を示す。 ※3 巻縁は「巻」、折り ※4 口は「口縁部」、体は「体部」を示す。

な差異がほとんど見出せないため、法量と、さらに表面に圧痕される編組技法について検討を行う。なお、籠形土製品の部位名称は図1のとおりである。

(1) 法量と圧痕された編組技法

法 量 口径 9.8 ～ 16.6 cm、器高 2.0 ～ 4.3 cm で、特に口径 10 ～ 13 cm、器高 2.6 ～ 4.3 cm に密に分布が認められる（図2）。最も口径の小さいものは、昼飯大塚古墳から出土する椀状の器形のもので、明確に出土する古墳は当該古墳のみであることから、例外的なものと判断される。また、口径 15 cm を越える一群は、岡山県内の古墳に出土が限られ、金蔵山古墳、陣

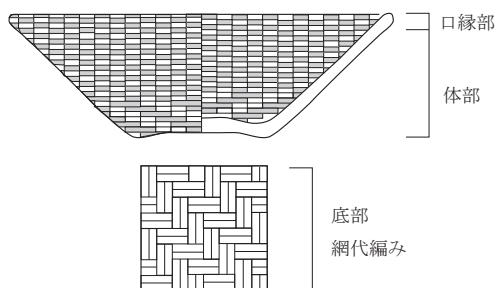


図1 籠形土製品の模式図

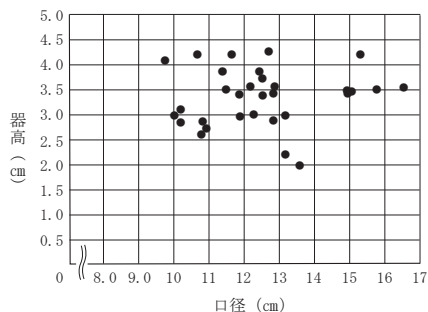


図2 籠形土製品の法量散布図

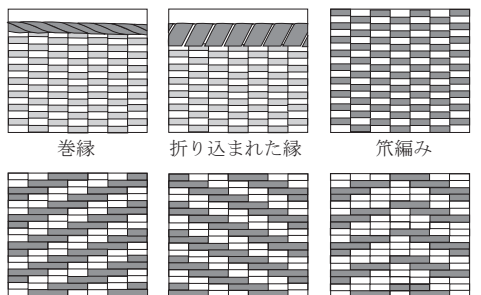


図3 本稿で取り扱う口縁部・体部の編組技法

馬山古墳、月の輪古墳出土資料である。このうち、陣馬山古墳は金蔵山古墳出土のものと同文様が酷似する盾形埴輪を円筒棺に用い（木村・土井 1957 : p. 11）、籠形土製品をその透かし孔を塞ぐために用いる 2 次的転用である。月の輪古墳は、出土埴輪が金蔵山古墳のものに関連することが指摘されている（近藤編 1960 : pp. 276-299）ことに鑑みれば、法量が他地域よりやや大きく地域的にまとまる背景には、金蔵山古墳との関係性、月の輪古墳においていえば、例えば原体となる籠や籠形土製品の製作に関わる工人の交流等が想定され、埴輪で安川満が想定するように（安川 2019 : p. 190）、籠形土製品を含む飲食物供献儀礼においても金蔵山古墳など古備中枢を媒介して周辺地域へ広がった可能性が想定される。

一方、その他の古墳では岡山県の事例ほど明確でないものの、古墳内でみればより近似値を示す場合が多く、篠原が指摘するように同一遺跡から出土した籠形土製品は概ね同大・同形（篠原 2003 : p. 24）を志向したもののといえそうである。

圧痕された編組技法 籠形土製品の表面に圧痕された原体の籠の編組技法については、篠

原や東方がすでにまとめており（篠原 2003 : pp. 15-34・東方 2010 : pp. 41-51）、それらに依拠しつつ箆形土製品に圧痕された編組技法について検討を加える。なお、本稿で取り扱う編組技法は図1・3のとおりである。まず、箆形土製品の原体となった籠の編組技法について簡単に示しておきたい。籠の編組では、底部を形成したあとそのまま立ち上げて、籠の体部を構成する材を「タテ材」と呼び、タテ材の間を編むものを「ヨコ材」と呼ぶ。ヨコ材の編み方は「超え」、「潜り」、「送り」により表現され、「超え」はタテ材の上をヨコ材が飛び越えた部分をさし、「潜り」はタテ材の下をヨコ材がくぐり抜ける部分をさす。また、「送り」はヨコ材がタテ材を超えた部分が次段では左右どちらかにずれ、そのずれた部分をさす。箆形土製品は研究史でも示したように、編組技法は共通性が高く、基本的に大きく3つの技法で製作されている。一つは幅0.2～0.4 cm⁽⁵⁾の材を8～12本使用し、2本一組として底部を2本取り2本超え、2本潜り、1本送りの「網代編み」で製作し、さらに底部を編んだタテ材を起こし、それに幅0.1～0.2 cmのヨコ材を用いて2本超え、2本潜り、1本送りで数段から十数段の「綾編み」をつくる。綾編みの上部には幅0.1～0.2 cmの材で1本超え、1本潜り、1本送りの「箆編み」をつくる。ただし、実際に箆形土製品を観察すると、その他にも少数ながら他の編み方も確認することができる⁽⁶⁾。

なかでも綾編みには3種の編み方が確認でき、箆形土製品を正方形の底部各四辺の正面、つまり外側からみた際に、送りが右上がりにみえるもの、左上がりにみえるもの、面の中央に向かって左右から上がるようにみえるものがある。これらは一つの古墳、さらには1つの箆形土製品内でも共存することがあり、その選択にあたっては製作者の僅差や製作者が異なることによる等が想定される。ただし、左右上がりの綾編みについては、確認される古墳が播磨や山城、伊勢、三河地域とやや偏りが認められそうで（表2）、注意が必要である。籠の編み方は、土器の製作技法等と同様、地域性をもつことに由来するといえるかもしれないが、集落の籠の編組技法が不明確であるため、今後の課題としておきたい。

また、籠の縁仕舞の圧痕については、巻縁とみられるもの、タテ材が内側に折られたとみられるもの⁽⁷⁾（図3・4）、確認できないものがある。最も多くみられるのは、これまで指摘されているとおり、縁仕舞の圧痕が確認できないもので、前期後葉の段階では不明瞭であるが、前期末中期初頭には概ね確認できないものが大勢となる。この背景について篠原は「篋切り・指ナゲにより巻き止め部分の痕跡が消されたとすれば、手法的な問題ではなく、土器の成形・整形上の理由であることは明らかである。筆者の経験からいえば、箆を「型」として土器を製作する際、口縁部の切り離しは最大の難関であり、縁の部分で粘土を切り取り整形するか、端部の未処理の編組品を用いて整形するなどの方法を探らざるを得ない。」（篠原 2003 : p. 26）とする。一方、東方は「内面底部に圧痕がつかない例や、端部を切り取り調整する例等からすると、箆をそっくりそのまま映すことを目指したというより、編み目を写し取ることに重点があっ

表 2 籠形土製品の綾編みの傾向

古墳名	所在地	綾編みの組み合わせ				
		右	左	右と左※1	左右	左右と右 / 左※2
北山1号墳	鳥取県	1				
渋野丸山古墳	徳島県	2				
金蔵山古墳	岡山県	3	1			
陣馬山古墳	岡山県	1	5			
月の輪古墳	岡山県				1	
久津川車塚古墳	京都府	1				
梶塚古墳	京都府	1	1		1	
行者塚古墳	兵庫県			2		2
クワンス塚古墳	兵庫県				1	1
巣山古墳	奈良県	1		1	2	
五社神古墳	奈良県		1			
コナベ古墳	奈良県		1			
郡山新木山古墳	奈良県		1			
百舌鳥御廟山古墳	大阪府		1			
誉田白鳥遺跡	大阪府	3	1			
宝塚1号墳	三重県		1			
高塚山古墳	三重県	1	3	3	3	
船山第1号墳	愛知県		1	1	1	

※1 「右と左」とは、一つの籠形土製品でどちらもみられることを示す。 ※2 「左右と右 / 左」は、一つの籠形土製品に綾編みの左右上がりともしくは左上がりもどちらもみられることを示す。 ※3 籠形土製品の個体識別は圧痕の段数や胎土、口縁部の調整などから総合的に判断して行った。 ※4 籠形土製品の全面の圧痕状況が不明確でも、一つ以上わかる場合はその編み方が全面にあるものとして取り扱っている。

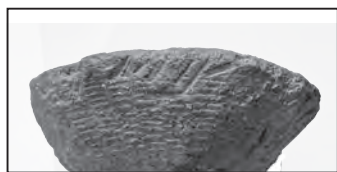


図4 折り込まれた縁が圧痕された巣山古墳の籠形土製品

たように見受けられる。あるいは、「見た目に箆を模したものであることが分かればよい」という意識で製作されたと考えられる。」と解釈している（東方2003：p.47）。筆者も実際に籠形土製品に使用されていた籠を復元製作し、籠形土製品の製作実験を試みたが、外型の籠を外す際、粘土を張り付けた籠を逆さまにし外面底部を押圧すれば、籠の柔軟性から

籠の縁部分の離脱はそれほど難しくなかった。さらに、粘土が乾燥していれば乾燥による縮小もありより容易であった。篠原が指摘する「篋切り・指ナデにより巻き止め部分の痕跡が消された」痕跡が現状では明確に確認できないこと、また上記の実験結果や籠形土製品がみられる前期末中期初頭から中期後葉まで断片的に巻縁や何かしらの縁仕舞の痕跡とみられるタテ材を内側に折り込んだ痕跡があるものが認められることに鑑みれば、東方が指摘するように、製作技法上の問題ではなく、土製品自体を籠にみたてるための選択的手段とみる方が実態に即しているといえる。

（2）製作技法と調整

次に籠形土製品の製作技法と調整について検討を行う。

製作技法 籠形土製品は内外から籠を挟み込んで製作されるが、挟まれる粘土については、す

べて粘土板というわけではなく、実際に観察すると、奈良県
 集山古墳や京都府鞍岡山3号墳のように粘土紐・帯積み上げ
 に伴う内傾の粘土接合痕を、底部や体部下付付近等に確認で
 きるものがあり（表1・図5）、特に前期末中期初頭にあつ
 ては、粘土板での製作だけでなく、粘土紐・帯の積み上げに
 より製作したものが存在するといえる。その製作工程を観察
 しえた接合痕から復元するとすれば、土器と同様に平たく押
 しつぶした粘土を底とし、それに粘土紐もしくは帯を積み上
 げ、ある程度浅鉢状に形を整えたのち⁽⁸⁾、外型の籠に押しつ
 けて整形して、その後内型の籠を押圧して製作したものと想
 定される。しかし、中期前葉以降、粘土接合痕が明確に観察
 できる資料が減少する。破片資料も多く蓋然性が高い傾向を
 読み取することは難しいが、ここではすでに指摘されている粘
 土板づくりでの製作だけでなく、粘土紐・帯積み上げによる
 製作が少なくとも前期末中期初頭に存在する可能性が高いこ
 と、また中期前葉以降、明瞭
 な粘土接合痕を見出し難い状
 況から、粘土板での製作が主
 流となる可能性が想定される
 ことを指摘するにとどめた
 い。

調 整 籠形土製品は、基
 本的に籠の圧痕後、未調整で
 あるとみられるものが多
 く⁽⁹⁾、少なくとも外型の籠に
 ついてはある程度の乾燥を経
 てから取り外されたと考えら
 れている。奈良県集山古墳や
 同県ウワナベ古墳で籠圧痕
 後、口縁端部をケズリにより

調整していることはこの想定を補強するものといえる。また、金蔵山古墳や高塚山古墳等で籠
 圧痕後に口縁端部をナデ調整するものが存在するが、これらは内型の籠を外せば調整可能な範
 囲といえる。しかし、中期前葉以降は体部への調整等が認められる資料が存在し、明確にまだ

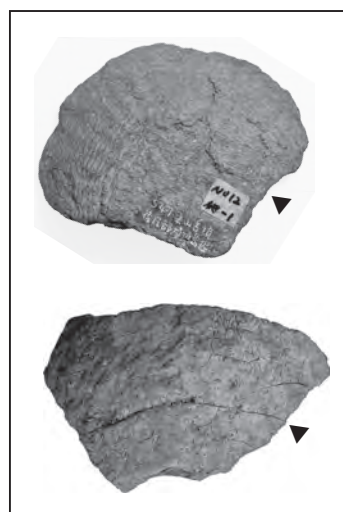


図5 粘土紐・帯積み上げに伴う
 とみられる粘土接合痕をも
 つ籠形土製品
 上：集山古墳 下：鞍岡山3号墳

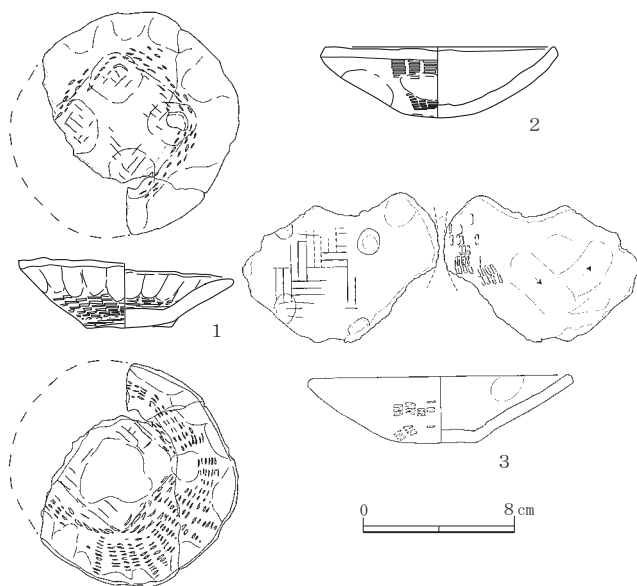


図6 籠圧痕後体部への外面調整を行う籠形土製品
 1：クワンス塚古墳 2：北山1号墳 3：久津川車塚古墳

乾燥が十分でない段階で外型の籠を取り外したといえるものが存在する（図6）。兵庫県クワンス塚古墳では、籠圧痕後の籠形土製品の内外面を、体部付近から口縁部にかけてナデ上げているほか、鳥取県北山1号墳や京都府梶塚古墳ではユビオサエの痕跡が明瞭に残り、大阪府百舌鳥御廟山古墳では外面体部下部に圧痕後布目痕やナデの痕跡が確認できる。また、京都府久津川車塚古墳では、籠の圧痕後、外面底部に強いナデもしくはケズリにより編組が消されたと想定されるものが存在する。このことにより、中期前葉以降、乾燥工程の短縮化と籠圧痕後にその痕跡を消しさる事例がみられることから、籠の目を写し取ることへの意識の薄れを傾向として読み取ることができる⁽¹⁰⁾。

4. まとめと今後の課題

以上みてきたように、籠形土製品の基礎的な属性の意味について若干の検討を行った。主な検討成果としてあげられるのは、法量や形態、圧痕される編組技法に共通性が高いとされてきた籠形土製品において、製作技法からは、大きくは前期末中期初頭から中期前葉以降にかけて変化を認めうる可能性があり、圧痕後の調整の在り方からは、籠の編み目をつけることに対する観念の薄れが認められるなど粗雑化が進むものと理解できること、また一方、原体となる籠に関連する法量や編組技法に着目すれば、籠形土製品は原体も含め特に岡山県では比較的明瞭だが、他の古墳でも法量にまとまりがあることから、各古墳や地域での生産が推測される。ただし、その具体的な生産体制を検討するにあたっては、中條が昼飯大塚古墳で行ったように（中條 2003：pp. 447-454）、籠形土製品と共伴する食物形土製品や小型土師器、ひいては埴輪との胎土の類似等の理化学的な分析を伴う検討が必要となる。大王墓で執り行われた儀礼を各地域で、その用具を含めて再現することは、当時の地域社会にとって、中央政権との紐帯や権威を示すうえで重要な事柄であったことが想像される。儀礼に使用される道具をどこでどのような体制で生産するかは、儀礼執行の実態に迫る重要な視点であり、今後も儀礼に伴う道具から検討を進めていきたいと考えている。

謝 辞

本稿は大阪大学大学院に提出した修士論文の一部に、新たな資料やその後の資料調査の知見等を追加し大幅に加筆・修正したものです。福永伸哉先生、高橋照彦先生よりご指導いただくとともに、中久保辰夫先生や当時在籍されていた多くの研究室の先輩、同輩、後輩に大変お世話になりました。また、本稿を成すにあたっては、以下の機関に資料見学や未報告資料の所見掲載許可等格別のご配慮を賜りました。記して感謝致します。

井原市教育委員会、大垣市教育委員会、大山崎町教育委員会、岡山市埋蔵文化財センター、各務原市埋蔵文化財調査センター、加古川市教育委員会、加西市教育委員会、河合町教育委員会、宮内庁、倉敷考古館、桑名市教育委員会、神戸市教育委員会、広陵町教育委員会、堺市博物館、精華町教育委員会、総社市、奈良市教育委員会、徳島市教育委員会、豊川市教育委員会、松阪市教育委員会、美咲町、湯梨浜町教育委員会、立命館大学考古学研究室（五十音順、敬称略）

註

- (1) 研究史では、当該資料や原体となった編組品について、各筆者が論文等で用いた名称を「」をつけてそのまゝを用いている。
- (2) 東方は昼飯大塚古墳出土「箆形土器」について以下3つに分類した。一つは2枚の「箆」の間に粘土板をはさみ両面から押圧して製作するもの（東方分類A類）、二つは1枚の「箆」の内側におそらく粘土板を押しつけて製作しているもの（東方分類B類）でいずれも「箆」と同様の逆三角形の形態となるもの。三つは手づくねで椀状の器形を製作し「箆」に入れて整形もしくは乾燥させる椀状の器形をなすもの（東方分類C類）である（東方2003：p. 272）。
- (3) 民俗学の参考文献については、藤森寛志氏にご教示いただきました。記して感謝申し上げます。
- (4) 「土製品」という用語は中條英樹が指摘するように、そのまま土によって形作られた製品という意味で用いると土器もその範疇に含まれるが、考古学的な用語としては「祭祀」や「儀礼」とともなうと考えられる土製品に対しても用いられているものである（中條2003：p. 447）。したがって、本稿でも「土製模造品」ではなく「土製品」を用いる。
- (5) ここでは、あくまで籠形土製品からみた編組の状況を示すものであるため、粘土の乾燥や焼成による縮小については、考慮していない。
- (6) 三重県高塚山古墳では箆編みをせず口縁部まで綾編みで編んだものや、奈良県ウナベ古墳では底部内面に4本超え、4本潜り、1本送りの網代編みがある。
- (7) この折り曲げられた材は、巻縁の際に内側に出たタテ材の余剰部分であることも想定されるが、巻縁が圧痕される他の籠形土製品からその痕跡は確認できないことから、別の縁の処理技法に関わるものと推測される。
- (8) 陣馬山古墳では、圧痕前にハケ調整を行った痕跡が確認できるものがある。
- (9) 籠形土製品の口縁部形態についても様々なバリエーションが存在するが、現状で一定の傾向を読み取ることは困難である。
- (10) 乾燥工程を短縮した背景として考えられる一つの案は、籠の連続的な使用のためである。前期末中期初頭に属する巣山古墳では、2個体の籠形土製品が出土しているが、各内外面の籠は編組の在り方や編む段数から全て異なる籠を用いたことが確認できる。残存状況が不良であるため明瞭でないが、中期前葉以降、同一の籠を用いて連続で製作するため、外型の籠を比較的早い段階で取り外したと想定することもできなくはない。今後、資料増加を待って検討すべき課題である。

引用・参考文献

- 朝岡康二・工藤員功・田邊悟・田村善次郎編 1997『日本民具辞典』株式会社ぎょうせい、東京
- 植松なおみ 1980「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『物質文化』35 物質文化研究会、愛知：
pp. 20-35
- 大賀克彦 2002「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ
清水町教育委員会、福井：pp. 1-20
- 鐘方正樹・角南聡一郎 1997「籠目土器・箆形土製品」『奈良市埋蔵文化財センター紀要』奈良市教育委員会、奈良：pp. 1-15
- 木村幹夫・土井秋夫 1957「九 円筒棺を出した備前赤磐郡江尻陣馬山前方後円墳について」『瀬戸内考古学』創刊号 瀬戸内考古学会、岡山
- 工藤員功 1982『暮らしの中の竹とわら』日本人の生活と文化6 株式会社ぎょうせい、東京
- 小林行雄 1964「籠籬」『続古代の技術』塙書房、東京：pp. 140-158
- 近藤義郎編 1960『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会、岡山
- 笹生 衛 2020「古代大嘗宮の構造と起源—祭式と考古学資料から考える祭祀の性格」『神道宗教』254・255号 神道宗教学会、東京：pp. 87-120
- 佐藤美津夫 1937「備前金蔵山古墳出土の箆形土器」『考古学』8-1 東京考古学会、東京：pp. 15-17
- 篠原浩恵 2003「箆形土製品神饌具考」『祭祀考古学』第4号 祭祀考古学研究会、東京：pp. 15-34
- 角南聡一郎 1999「弥生～古墳時代前期の籠目・籠形土器」『香川考古』第7号 香川考古刊行会、香川：
pp. 17-30
- 中條英樹 2003「土製品からみた墳頂における儀礼について」『史跡 昼飯大塚古墳』大垣市埋蔵文化財調査報告書第12集 大垣市教育委員会、岐阜：pp. 447-454
- 豊川市教育委員会 2015「船山1号墳の発掘調査」『発掘だより』No. 43、愛知県
- 西谷真治・鎌木義昌 1959『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告第1冊、木耳社：東京
- 林 英男 2006「籠」『精選 日本民俗辞典』吉川弘文館、東京：pp. 122-124
- 平子 弘 1989「籠目土器」『阿山郡伊賀町 天道遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告89 三重県教育委員会、三重：pp. 22-26
- 東方仁史 1997「箆形土器」『行者塚古墳発掘調査概報』加古川市文化財調査報告書 加古川市教育委員会、兵庫：pp. 88-90
- 東方仁史 2003「箆形土器について」『史跡 昼飯大塚古墳』大垣市埋蔵文化財調査報告書第12集 大垣市教育委員会、岐阜：pp. 272-273
- 東方仁史 2010「箆形土器研究ノート」『遠古登攀』遠山昭登君追悼 考古学論集 『遠古登攀』刊行会、兵庫：pp. 41-51
- 広瀬和夫 1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社、東京
- 穂積裕昌 2022『大嘗祭の考古学』考古学からみた古代祭祀2 雄山閣、東京
- 堀 大輔 1997「西造り出し出土の土製品」『行者塚古墳発掘調査概報』加古川市文化財調査報告書

加古川市教育委員会、兵庫：pp. 90-92

安川 満 2019「金蔵山古墳の埴輪群と周辺地域」『金蔵山古墳―範囲確認発掘調査報告―』岡山市教育委員会、岡山：p. 100

挿図出典

図1～3、表1・2 筆者作成

図4・5 筆者撮影

図6 1:内外面図は加古川市教育委員会 2023、断面図のみ筆者実測・トレース 2:筆者実測・トレース 3:立命館大学文学部 2020

表1参考文献

1. 大山崎町教育委員会 2007『境野1号墳』大山崎町埋蔵文化財調査報告書第34集 2. 神戸市教育委員会 2006『史跡 五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』 3. 奈良市史編集審議会編 1968『奈良市史』考古編 4. 奈良市赤塚次郎 1979「「古市方形墳」整理ノートより」『古代学研究』第89号 古代学研究会 5. 奈良県教育委員会 1975『佐味田坊塚古墳』奈良県文化財調査報告23 6. 河合町・河合町教育委員会 1998『国指定史跡 ナガレ山古墳』 7. 大坪州一郎 2011『京都府精華町 鞍岡山3号墳の調査』『考古学研究』第58巻第1号 考古学研究会 8. 松阪市教育委員会 2005『史跡宝塚古墳』松阪市埋蔵文化財報告書1 9. 桑名市教育委員会 2006『三重県桑名市高塚山古墳基礎調査報告書』 10. 大垣市教育委員会 2003『史跡 昼飯大塚古墳』大垣市埋蔵文化財調査報告書第12集 11. 各務原市埋蔵文化財調査センター編 2022『坊の塚古墳：第1・2・3・4・5・6次発掘調査報告書』各務原市教育委員会 12. 井原市史編纂委員会編 2005『井原市史』1 自然風土・考古・古代・中世・近世通史編 井原市 13. 西谷真治・鎌木義昌 1959『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告 第1冊 木耳社 14. 安川満編 2019『金蔵山古墳―範囲確認発掘調査報告―』岡山市教育委員会 15. 木村幹夫・土井秋夫 1957「九 円筒棺を出した備前赤磐郡江尻陣馬山前方後円墳について」『瀬戸内考古学』創刊号 瀬戸内考古学会 16. 宮内庁書陵部 2005「神功皇后 狭城盾列池上陵墳塋裾護岸その他整備工事区域の調査および墳丘外形調査」『書陵部紀要』第56号 17. 近藤義郎・中田啓司 1997「三笠山古墳」『総社市史』考古資料編 総社市 18. 森浩一 2003「失われた時を求めて―百舌鳥大塚山古墳の調査を回顧して―」『堺市博物館報』第22号 堺市博物館 19. 清喜裕二・有馬伸・加藤一郎 2011「小奈辺陵墓参考地 墳塋裾護岸その他整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第62号 宮内庁書陵部 20. 木下亘 1988『史跡 乙女山古墳 付高山2号墳―範囲確認調査報告―』河合町教育委員会 21. 加藤一郎・横田真吾 2013「【陵墓関係調査報告】郡山陵墓参考地整備工事予定区域の事前調査」『書陵部紀要』第64号〔陵墓篇〕平成24年度 22. 大手前大学史学研究所・加古川市教育委員会 2024『行者塚古墳』墳丘・造り出し編 23. 加西市教育委員会 2023『クワンス塚古墳』加西市埋蔵文化財調査報告78 24. 立命館大学文学部 2020『久津川車塚古墳 2019年度発掘調査概報』立命館大学文学部考古学実習研究報告第2冊 25. 共同研究「月の輪古墳」編集部 1960『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会 26. 山陰考古学研究所 1978「〔5〕北山1号墳」『山陰の

前期古墳文化の研究』 27. 徳島市教育委員会社会教育課編 2017『史跡渋野丸山古墳発掘調査報告書 I』徳島市教育委員会 28. 徳田誠志・清喜裕二・加藤一郎 2010『【陵墓関係調査報告】百舌鳥陵墓参考地 墳丘裾護岸その他整備工事に伴う事前調査』『書陵部紀要』第 61 号〔陵墓篇〕平成 21 年度宮内庁書陵部 29. 鐘方正樹・角南聡一郎 1997「籠目土器・笱形土製品」『奈良市埋蔵文化財センター紀要』奈良市教育委員会 30. 城陽市教育委員会 1988『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 31. 豊川市教育委員会 2015「船山 1 号墳の発掘調査」『発掘だより』No. 43 32. 大阪府教育委員会 1972『誉田白鳥遺跡発掘調査概要』大阪府文化財調査概要 1971 - 4